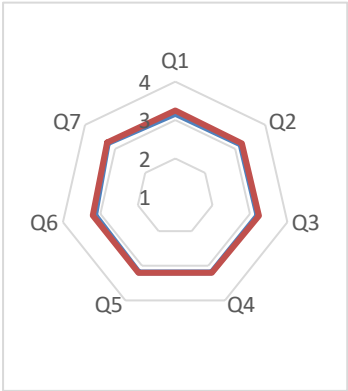
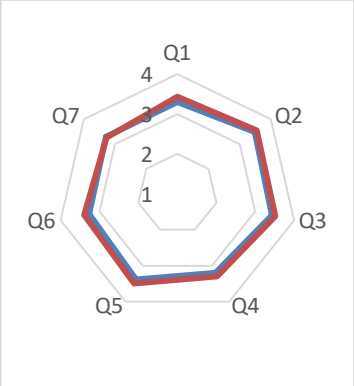
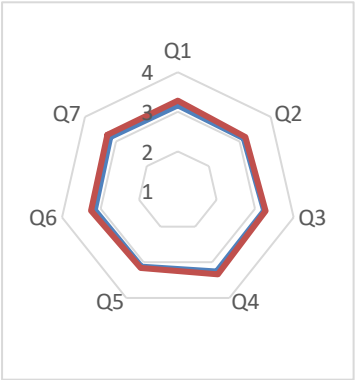
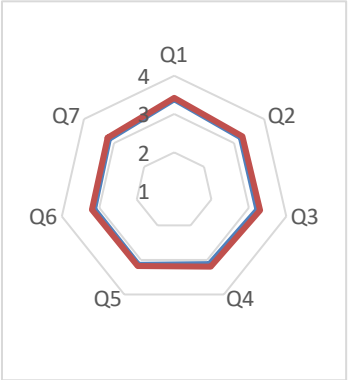
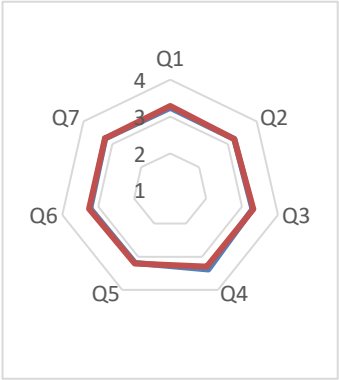
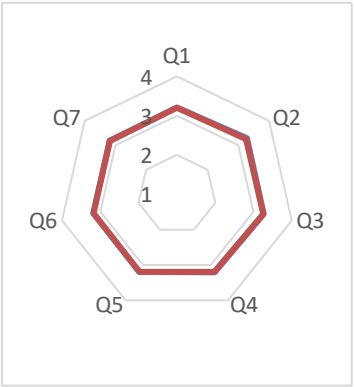
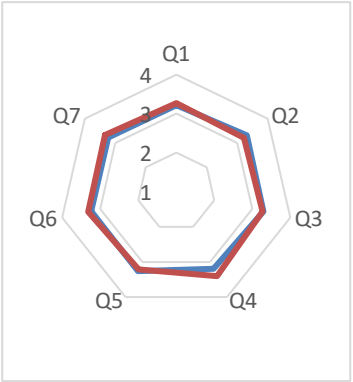
生徒による授業評価（第2回） 教科ごとの結果および分析

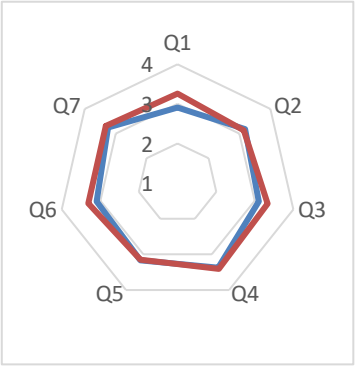
生徒による授業評価（第２回）を、11月16日～12月15日の間に実施しました。
次の質問項目について、かなり当てはまる（４点）、ほぼ当てはまる（３点）、あまり当てはまらない（２点）、ほとんど当てはまらない（１点）として点数化し、平均をグラフ（**第１回：青線**、**第２回：赤線**）として表示しています。（４点満点）

【質問項目】
Q1:毎時間の授業や単元（内容のまとまり）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある.
Q2:単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある.
Q3:単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある
Q4:授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた
Q5:他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた
Q6:授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた
Q7:授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた

教科	結　果	結果の分析	これからの取組
国語		前期同様、いずれの項目においても「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」の合計が8割以上と高く、授業に対して概ね満足していることがわかる。また各項目における「あまり当てはまらない」、「ほとんど当てはまらない」の合計は前期と比べ1割ほど下がっていることから、授業での学びが身に付き、さらにそれを活用することができるようになったと感じる生徒が増えてきていると考えられる。	生徒が授業で得た知識を活用する機会や、他者の意見を知り自らの知識や考えを深める機会を充実させるために、教科横断の視点に立った授業づくりやICTの活用法について教科で検討し、改善していく。
地理歴史		前期同様、全体としては、どの項目についても、生徒たちは8割以上が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と授業を好意的に受け止めている。前期よりも、「他者の考えを知る機会がある」「授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた」の項目で、「かなり当てはまる」とする生徒が増えてきており、学びを深めることの手応えや、学習内容の定着を実感することができていると考えられる。	「他者の考えを知る機会がある」とする一方で、「他者の考えを知ることにより、新たな考えを知るなど、自らの考えを広げ深めることができた」「自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた」という項目については、「ほぼ当てはまる」とする生徒は漸増しているが、「かなり当てはまる」とする生徒はやや減っている。授業や他者から学んだ内容を、その場その時に受け取って終わりにせず、自己の内部に投影し粘り強く学びを自己調整して、学んだ内容を抽象化し、別の場面でも普遍的に活用できる力を付けていく必要がある。

教科	結　果	結果の分析	これからの取組
公民		全体としては、9割以上が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」を選んでおり、前期の調査に比べ全体的に割合が上がっている。詳しく分析すると、「授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた」や「授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた」点については相対的に低い割合になっており、授業の結果自分に力がついたという実感につながっていない層があると受け止められる。また、前期に続き「自分の考えをまとめたり解決方法について考える」「他者の考えを知り、自らの考えを深め広げる」点については評価が高かった。前回低めであったQ1も改善している。	授業の効果を実感させるために、振り返りやまとめの時間を設けて生徒自身の考えを整理させる。また、単元のまとめの時間に、それまでに学んだことと関連付けて考えさせる。 前期から引き続き、単元のねらいや毎時のねらい、振り返りについて、メリハリをつけて提示していく。また、Googleフォームによる意見共有、などを継続するとともに、さらにより良い手段を探っていく。
数学		全ての項目に対して、4・3を選択している生徒が多数いるので、授業に満足していると分析する。満足している理由として、①小テストの実施、②生徒のレベルに合わせた演習プリントの実施が考えられる。①では、今までの内容を復習することで、さらに授業内容の定着を図ることができる。②では、プリントを通して、生徒の取り組みを教員が把握し、生徒のつまずき等を授業でフォローすることができる。①、②を通して、生徒の学力を伸ばすよう授業を実施している。しかしその一方で、不得意になる生徒がいることが課題である。	インターネット教材を活用できるように、教科で検討していきたい。数学という教科で、端末のどのような活用方法があるのか模索していきたい。数学の学力上位層を増やせるように、授業力向上を図る。また、苦手意識を持つ生徒に手厚い指導を心がけるとともに、上位層を伸ばせるよう教科としても対応していきたいと考えている。
理科		いずれの項目も「かなり当てはまる」または「ほぼ当てはまる」が8割を超えており、高い評価であった。特に、授業ノート（ポートフォリオ）によるルーブリック評価を通じた学習活動、授業ごとの振り返りシートを活用した振り返り活動等により、生徒が授業のねらいを理解したものと考える。	ICT活用について、タブレット端末で生徒に実験データを処理させることや、センサー類を活用した情報収集などを試していきたい。

教科	結　果	結果の分析	これからの取組
保健体育		大半の生徒が「3ほぼ当てはまる」「4かなり当てはまる」を回答した。その中で、Q3「単元の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある」が一番多い結果となった。複数の種目で学習ノートをまとめることを継続してきたことで、授業内で自分の課題を意識しながら活動できる場面が増え、このような結果につながったと考えられる。	今後も、授業のねらいや課題を考えながら活動できるような指導に継続的に取り組み、技能の向上を図っていく。また、全体的な満足度の向上のために、教科内で授業内容や研修内容の情報共有、研究協議を行い、指導力の向上に努める。また、他者の考えを知る機会を設けていくために、生徒同士で考え、教え合う時間を設けたり、チーム内で作戦や課題を考えさせる等の生徒同士が対話的・主体的に取り組めるような活動を工夫していくことが必要だと考える。
芸術		大半の生徒が、「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」に該当している。他者の意見を取り入れながら、生徒は深く学習できているようだ。また、自ら課題を見つけて取り組み、身に付いたことやできるようになったことを実感しているようだ。	単元の中で指導に生かすための評価を細かく行うことで生徒の学習状況を把握し、授業で効果的に助言できるようにしたい。
外国語		全ての項目において「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」が80%以上であり、項目間の差はあまりない。教材研究や教員間での連携を通じた授業改善が評価に表れていると考えられる。	授業の満足度と授業への参加状況に関して、高い評価が維持できるよう、引き続き検定試験を想定した授業や4技能の力をバランスよく伸ばす工夫をした授業を実施する。また、今後も英検等の外部試験の受験を勧奨し、日頃の学習活動とCEFRの到達レベルのつながりを意識した指導をしていきたい。
家庭		どの項目についても、90%以上の生徒が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答している。しかし、「他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある」という項目がやや低い。家庭基礎においては授業での知識や技術を実生活に活かすこととともに、各単元で身に付いたことをまとめ、共有することで自分の意見を他者に伝える機会を増やすことが課題である。	授業の内容を実生活と結び付けて考えられるように促す。そのために、授業で身に付いたこと、できるようになったことを単元ごとに確認したり、他者と意見を共有する時間を増やすことで自らの考えを広げ深められるようになる。

教科	結　果	結果の分析	これからの取組
情報		いずれの項目も、4：かなりあてはまる・3：ほぼあてはまるの項目が高い割合を占めていることから、授業評価としては授業改善の取り組みが表れていると考えられる。	タイピング力が高まって情報に自信を持つ生徒が増えた一方で、タイピングに伸び悩みを抱えている生徒に関しては、粘り強い指導が必要である。プログラミングを通して、タイピング力を伸ばし、より一層高めていくことが必要である。また、学校全体で情報活用能力を高めていくことが求められており、引き続き教科としてその一役を担えるよう支援していきたい。